

ドキュメント映画「音のない世界で」にみる聴覚障害者のアイデンティティ

都 築 繁 幸 (東京通信大学) *)

要約 1999年に米国で放映されたドキュメンタリー番組「Sound and Fury (日本版題名; 「音のない世界で」と続編の「Sound and Fury-six years later (「音のない世界で-6年後-)」(2006)に登場する聴覚障害者と健聴者のセリフをテキストマイニングによる分析を試み、登場人物の共起ネットワークを検討した。そのサブグラフを伊藤 (2008) のモデルに適用し、登場人物のアイデンティティに移行が認められるかどうかを検討した結果、人工内耳の手術を受けた聴覚障害者は、ろう者であるというアイデンティティを持って、聾者社会と健聴者社会を行き来する様相が示された。人工内耳の手術を受けることにより、登場した4つの家族のコミュニケーション方式が、話し言葉と手話の二つが保障され、4つの家族の絆が強固なものになったと推察された。今後、合理的配慮がされることにより、聴覚障害者のアイデンティティを聾者社会と聴者社会を行き来するということに流動的に捉えていくことが示唆された。

キーワード: コミュニケーション・モード 聾者社会 健聴者社会 共生社会 多様性

I. はじめに

1999年に米国で放映されたドキュメンタリー番組「Sound and Fury (日本版題名; 「音のない世界で」以下、前編とする) は、世界中で大きな反響を呼んだ。健聴の両親のもとで育った、聴覚障害の兄と健聴の弟が聴覚障害である自分の子どもに人工内耳を選択するかどうかを取り上げたものである。兄は、聴覚障害の両親から生まれた聴覚障害の女性と結婚し、子どもは二人とも聴覚障害児である。弟は、聴覚障害の両親から生まれた健聴の女性と結婚し、子どもは双子であった。そのうちの一人が聴覚障害者、もう一人が健聴者であった。兄夫婦の長女の聴覚障害児であるヘザーが人工内耳の手術を希望しており、弟夫婦は、聴覚障害児の長男 (ピーター) に人工内耳の手術を受けさせたいと考えていた。番組は、これらの家族とそれぞれの祖父母の考え方を交錯させながら作成されている。ヘザー一家は人工内耳の手術を諦め、ヘザーが6歳の時にニューヨーク州からメリーランド州のバイリンガル教育の州立聾学校に転校した。ピーター一家は、人工内耳手術を受け、音入れがうまくいき、ヘザーの祖父母は喜ぶが、ピーターの祖父母は必ずしも喜びに満ち溢れていない場面で終わっている。

この番組は、今から23年前のものである。当時の米国聴覚障害教育界は、バイリンガル教育と人工内耳を巡り意見の対立が見られた。バイリンガル教育推進派は、兄夫婦の選択を是とし、人工内耳推進派は弟夫婦の選択を是とする傾向が見られた。前編を見た人工内耳推進派は、「音が聞きたい」と手話で話すヘザーの夢を諦めさせることにやるせない思いを感じ、バイリンガル教育推進派は、ヘザーが聾文化の中で育っていくものと考えていた。

この続編として「Sound and Fury-six years later (「音のない世界で-6年後-)」(以下、後編とする) が2006年に放映された。後編では、ヘザー一家が、メリーランド州からニューヨーク州に戻り、ヘザーが9歳の時に人工内耳の手術をうけ、12歳の今日、通常の学校でただひとり健聴の仲間に混じって、生き生きと中学校生活を送っている様子が描かれた。ヘザーの母親が人工内耳手術を受け、ヘザーとピーターの祖父母がそれぞれ、人工内耳に対する思いを述べ、ヘザーとヘザーの祖母が仲良く、散歩しながら祖母の昔話を語っている場面がラストシーンとなっている。後編をみた人工内耳推進派は、ヘザーやピーターの家族が選択したコミュニケーションに賛意を示し、バイリンガル教育推進派は、前編から想像できなかった展開に驚きを示した。ヘザーの両親は、何故、ヘザーの人工内耳の手術に踏み切ったのか、更に母親までが手術を受けたのかに関心が集まった。後編が放映された2006年当時の米国は、聴覚障害の子どもも成人も人工内耳手術を積極的に受け入れていく機運にあったからである。

前編は、日本においては2000年にNHKで放映された。当時、聴覚障害教育に関連する学会・研究会等でもこの問題が取り上げられ、手話言語と人工内耳の問題が熱く、語られた。聴覚障害児を育てた経験がある健聴者の伊藤 (2008) は、「幼い時に親が子どもの決断できない年齢で人工内耳の手術を決定してしまうことに問題があるのではないかとし、聴覚障害者が社会でおかれた状況により立場 (アイデンティティ) も変わっていき、生まれてすぐに人工内耳の手術を受け、口話法教育を受けた子どもが、ある時から手話を使うようになるかもしれない、聴覚障害者のアイデンティティは、聞こえる社会と関係が深く、障害者問題と考えるか、「ろう者」としての人権問題として考えるかにより教育も異なり、アイデンティティも異なるよ

*) 愛知教育大学名誉教授

うになると指摘している。一方、田中（2014）は、聴覚障害児を育てた経験と自身が言語聴覚士であるという立場から人工内耳（治療）の導入が日本の聴覚障害教育に与えた影響について論じ、人工内耳を肯定的に捉えて論評している。手話言語と人工内耳をめぐることは、種々の意見があり、聾文化を巡る論争が行われてきた（佐々木、2018；高嶋・杉本、2020）。

伊藤（2008）が社会学研究者の石川准氏の少数民族と多数派の関係を表す「エスニック地図」（石川、1999）に「聞こえない人」を当てはめ、「聾者（ろう者）社会と聴者社会の関係」をまとめた。図1の「聾者」は医学的障害者、口話法優先教育を受けた人を表し、「ろう者」は社会文化的違いを持つ人、すなわち、言語的少数派である手話を使う人を表すとしている。4つの部分は異なる聞こえない人のアイデンティティを表し、図1は社会の中での聾者（ろう者）と聴者の共生のあり方を示すとする。1と2は、聴者社会に聾者が同化しようと努力する同化主義社会を表し、3と4は同化しようとする考えはない、いわば多文化主義社会のろう者と聴者の共生を表すとする。

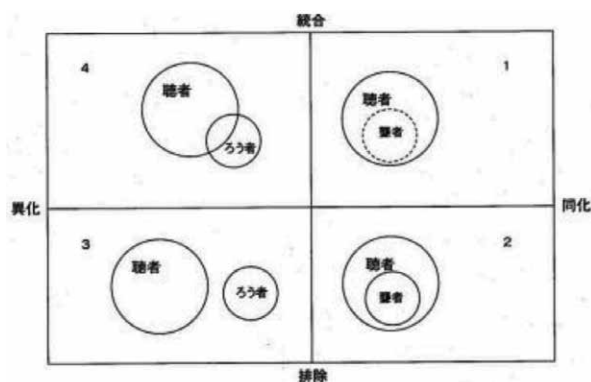


図1 聾者社会と聴者社会の関係（伊藤，2008）

本研究は、この伊藤のモデル（2008）を援用し、ドキュメント映画に登場した人物が何を主張しようとしていたのか、どのような要因で主張が変移していったのかを検討することとした。

この作業を進めていく上で種々の制約がある。ドキュメント映画は、製作者側の意向が反映されていることを容認しなくてはならないこと¹⁾、6年間の出来事を全て示しているわけではなく、いろいろな場面を切り取って構成していること、登場人物の意思表明をすべて映像にしているわけではないこと等が挙げられる。後編の制作スポンサーは、番組には前面に出ていないが、コクレア・アメリカ社であることから背後に何らかの商業主義が潜んでいるかもしれない。このような懸念はあるが、この作品そのものに対する社会的評価は、きわめて高く、あくまでも良質なドキュメント映画であるとみなせる^{2) 3)}。

以上のように、この二つの作品の登場人物の語りの分析を行うが、前述のように制約が見られることを前提に、聴覚障害者のアイデンティティが、どのような考え方・状況と関係があるかをコミュニケーションの選択の観点から分析する。これは、あくまでもドキュメント映画の事例の分析である。

Ⅱ. 方法

（1）作品の概要

1）登場する人物と家族構成・家族関係

映画には、4組の大家族が登場し、この4組が一つの大家族をなす構成となっている。

第1の家族は、聴覚障害者の父親（ピーター）と母親（ニタ）、子ども2人も聴覚障害者（ヘザーと弟）であり、4人とも聴覚障害者である。第2の家族は、健聴者の父親と母親（マリ）、子どもが双子であり、一人が健聴者、一人が聴覚障害者（ピーター）である。第3の家族は、第1の家族の父親の両親であり、健聴者である。第4の家族は、第2の家族の母親の両親であり、二人とも聴覚障害者である。

第1の家族の父親と第2の家族の父親は、兄弟関係にあり、兄が聴覚障害者、弟が健聴者である。第2の家族の母親は、CODAである。聴覚障害者の兄は、両親が聴覚障害者の聴覚障害者女性と結婚し、子ども2人が聴覚障害者であり、健聴者である弟は、CODAの女性と結婚し、双子のうちの一人が健聴者、一人が聴覚障害者である。第1の家族と第3の家族は、前編では一緒に生活していたが、別々に暮らすことになったが、後編では、再び、一緒に暮らすようになった。

2）あらすじ

① 前編

聴覚障害者である兄夫婦の子どものヘザーを中心に番組は展開される。ヘザーは、人工内耳の手術を受けたいと両親に訴える。これを健聴者の祖父母は、支持しているが、聴覚障害者の両親は決断がつかない。健聴者の弟夫婦は、双子のうちの一人である聴覚障害児に人工内耳を装用したいと考え、両親と兄弟で手話を使用せずにお互いにコミュニケーションをとりたいと考えていた。弟夫婦の妻の両親は、聴覚障害者であり、人工内耳にためらいを感じ、賛同は示していない。二人の聴覚障害児の人工内耳の手術をめぐる、4つの家族の葛藤が描かれている。番組としては、ヘザーは人工内耳の手術を諦め、ニューヨーク州からメリーランド州に転居し、バイリンガル教育を行っているメリーランド州立聾学校に通うことになり、弟夫婦は、子どもに人工内耳手術を行い、妻の両親の落胆が描かれた場面で終わっている⁴⁾。

2）後編

このドキュメント番組が放映されてから続編として

「Sound and Fury - six years later (「音のない世界で - 6年後 -)」が2006年に放映された。続編では、ヘザーの家族は、メリーランド州からニューヨーク州に戻り、ヘザーが9歳の時に人工内耳の手術をうけ、12歳の今日、通常の学校でただひとり健聴の仲間に混じっていきいきと中学校生活をしている様子が描かれている。また、ヘザーの母親も人工内耳の手術を受けたことも触れられている⁵⁾。

(2) 登場人物の意見の分析

今回は、「映画に登場する家族の一員が、それぞれが何を主張しようとしていたのか」を明らかにするためにテキストマイニングによる分析を試み、共起ネットワークを検討することにした。

まず、番組のセリフの日本語訳を文字化した。日本語訳は最終的には、筆者がおこなったものを使用した。これらのセリフをすべてデータとして入力した。次にテキスト分析ソフト KH Coder (ver.200f) により計量的に分析を行い、共起関係は Jaccard 係数の値により判断した。分析単位は文章とした。分析対象となる文章を単語の単位に区切り、単語頻度分析で出現回数を分析した。

ここでは、語りの分析を登場人物別に行うことにした。ヘザー (聴覚障害児) を分析1、ヘザーの父親であるピーター (聴覚障害者) を分析2、ヘザーの母親であるニタ (聴覚障害者) を分析3、ヘザーの祖父母であり、ピーターの両親 (健聴者) を分析4、ヘザーの叔母 (マリ) であり、ピーターの母親 (健聴者) を分析5、ヘザーの叔母であり、マリ (健聴者) の両親 (聴覚障害者) を分析6とした。

前編は、ほぼ80分、後編はほぼ30分である。登場人物の発言回数は異なる。今回は、登場人物が、前編と後編で語ったセリフを込みにして、前編と後編でどのように変移したかを検討する。

分析1では32文、分析2では90文、分析3では143文、分析4では90文、分析5では39文、分析6では14文が確認され、この中から出現頻度を限定して語を特定し、それらの語を使用して、語の共起関係を把握するために共起ネットワーク分析を行った。描画する共起関係は、上位60語、係数は0.2以上とした。今回は、文章中に出現する語と語が共に出現する共起関係を共起ネットワークとして図示した。結果の項で示す文は、文意を損ねない範囲で略記した。

Ⅲ. 結果

分析対象である6組の人物の共起ネットワークを図2から図7に示す。

(1) 聴覚障害児のヘザーの語りの分析

第1サブグラフ (「サブグラフ」は、以下、表記を省略する) は、「普通の人は、手話を使わない」(前編

を含み、「健聴者の手話の未使用」を示す。第2は、「私は学校の中で唯一の聾者だ」(後編)を含み、「通常の学校の唯一の在籍」を示す。第3は、「健聴児と聴覚障害児の両方と友だちになる」を含み、「友達は健聴者と聴覚障害者」を示す。第4は、「教室では、ときどき、わからないことがでてくるが、その時は、手話通訳者が通訳してくれるから大丈夫である」(後編)を含み、「教室での手話通訳者の情報保障」を示す。第5は、「人工内耳の手術を受けられてとても幸せ」(後編)、「人工内耳をつけるのは簡単?」(前編)、「人工内耳はいらないわ」(前編)、「人工内耳は欲しくない」(前編)を含み、「人工内耳手術前後の思い」を示す。第5は、母親のニタとヘザーとの人工内耳手術を受けるかどうかについての会話場面を示す。

(2) ヘザーの父親 (聴覚障害者) の語りの分析

第1は、「聾者には手話という対話の方法がある」(前編)、「健聴者の両親は、手話を使わなかったので身ぶりを見ても何を話しているのかわからず、対話はできなかった」(後編)、「メリーランド州では、妻はとても幸せだと考えていた」(後編)、「メリーランド州ではすべてうまくいっているようにみえるが、私は殆どの時間をニューヨークで過ごさねばならず、私を取り巻くすべてがとてもきついものだった」(後編)、「祖父母の家に引っ越した」(後編)、「自分の考えをすっかり変え、子どもたちに人工内耳の手術を受けさせ、幸せだと思っている」(後編)を含んでおり、「メリーランド州からニューヨーク州に戻ったことへの述懐」を示す。第2は、「弟夫婦の双子の一人が聴覚障害だと知ったとき、夫婦は打ちひしがれた」(前編)、「ヘザーが人工内耳手術を受けたいと言いついたとき、私と妻は拒絶されたように感じた」(後編)を含み、「聴覚障害であることによる絶望感」を示す。第3は、「今やヘザーが二つの世界を案内してくれていることがわかる」(後編)、「今、ヘザーが聾者と聴者の世界を共に生きていることがわかった」(後編)、「私たちは、3年間、別々に暮らしており、今、やっと、良い状態に戻ることができた」(後編)を含み、「ヘザーは健聴者文化と聾文化の二つの文化の懸け橋」を示す。第4は、「健聴児と遊んでいて、言葉が通じなかったとしても (聴覚障害児の) 息子に私たちは教えられない」(前編)を含み、「聴覚障害者が聴覚障害児に話ことばを教えることの限界」を示す。第5は、「聾文化と健聴者文化がお互いに理解を深め、支持・共存することがよりよいことだ」(後編)を含み、「健聴者文化と聾文化の共存」を示す。第6は、「私たちが一緒に時には手話で話し合う」(後編)を含み、「家族における手話コミュニケーションの使用」を示す。第7は、「私は耳が聞こえないが、音のない平穏な日々満足している」(前編)を含み、「音のない世界に満足」を示す。第8は、「(メリーランド州では) 妻は、家族

を見失い、皆がバラバラになっていた」(後編)を含み、「妻と家族の思い」を示す。

(3) ヘザーの母親(聴覚障害者)の語りの分析

第1は、(手話を使用しない人工内耳装用児を目の前にしてヘザーに)「通訳者がいるから大丈夫」(前編)、「聾者の学力が劣っているって言うの」(前編)、「夫に尋ねるとマリの言ったことは本当で、学力の育たない聾学校もある」(前編)、「夫からは、何のために、君には必要ないし、年を取りすぎている、話すことはできない、スピーチは君の言葉じゃない、と言われた」(後編)を含み、「人工内耳手術の不要の理由」を示す。第2は、「あなた(ヘザー)は、聾者の文化の中にいる」(前編)、「今は、まだ手術を受けさせたくない」(前編)、「聾者としての自覚を」(前編)、「子どもたちは、手話も聾者の文化も全く知らず、聾者としての自覚もない」(前編)を含み、「ヘザーが聾者文化にることによる人工内耳手術の延期」を示す。第3は、(母親のニタとヘザーの会話において人工内耳を諦める場面で)「他人の意見は気にせず、自分自身で決める」(前編)、「そう、自分で決めたんだね」(前編)を含み、「人工内耳手術の自己決断」を示す。第4は、「以前の私は心を閉ざし、人工内耳を嫌っていたが考え直した」(後編)を含み、「人工内耳の考え方の修正」を示す。第5は、(人工内耳の手術をおこなった家庭を訪問した場面で)「手術の前に、聾者の歴史や手話について調べたの」(前編)を含み、「人工内耳の手術前の理解」である。第6は、「大人は、手術を受けても簡単に話せるようにならないが子どもならできる」(後編)を含み、「子どもの人工内耳手術の可能性」を示す。第7は、「子どもたちが祖父母に会いたがっていることを感じていた」(後編)を含み、「ヘザーの祖父母への愛着」を示す。第8は、(人工内耳の子どもの母親の前で)「人工内耳をつけたら手話を使ってはいけないんですって」(前編)、(人工内耳の子どもの前でヘザーに)「手話を使いなさい」(前編)、(健聴者の母親に)「お嬢さんは手話を使いませんね」(前編)を含み、「手話への固執」を示す。第9は、(マリと人工内耳手術を巡って話し合っている場面で)「あなた(マリ)は、両親を見下し、息子(ピーター)が両親のようになることを恐れている」(前編)を含み、聴覚障害者への軽蔑心」を示す。

(4) ヘザーの祖父母(健聴者)の語りの分析

第1は、「ピーターとニタは、ただ一つのやり方、聾者のやり方しか受け付けられない」(後編)、「ピーターとニタは、子どもを聾者の世界にだけとどめておきたいのか」(後編)、「ヘザーは、聴者の世界にすることを望んでいる」(後編)、「ヘザーが聴者の世界に身を置いていることも知っている」(後編)、「聾者のための大学に行くことを望まないかもしれない」(後編)を含み、「ヘ

ザーの聾者世界への囲い込み」を示す。第2は、「子どもたちに適切な選択を行い、人工内耳を与え、自分たち家族の面倒を見るのであれば、私も喜んでお前(ピーター)を助けよう」(後編)、「ピーターが本当に恐れていたことは、自分の家族を失うことではないか」(後編)、「私は、自分の子どもに自分が幼い時に経験した思いをさせたくない」(後編)を含み、「家族への支援」を示す。第3は、(健聴者と聴覚障害者が一緒にレストランで食事している場面で)「聞こえる人たちと話しができるからだ」(後編)、(人工内耳の手術をヘザーがしていなければ)「みんなで手話で話していたでしょう」(後編)「コミュニケーションがとれなければ人間は大変であり、小さな世界にすることになり、そこから出ることはできない」(後編)を含み、「集団における聞こえ」を示す。第4は、「ヘザーは、9歳の時に人工内耳の手術を受けた」(後編)、「手話で話をしたいと考えているピーターは、自分の娘が人工内耳をつけると父親と話さなくなると思っていたのではないか」(後編)を含み、「父親の人工内耳手術後の懸念」を示す。第5は、「このような可能性が開き、それぞれの能力を発達させることを見ていると、これは天からの贈り物だ」(後編)を含み、「人工内耳による可能性の開花」を示す。第6は、「あなた(ピーター)は私の息子よ、愛している」(前編)を含み、「息子(ピーター)への愛」を示す。第7は、「子どもたちは、メリーランド聾学校に入った」(後編)を含み、「聾文化への接近」を示す。第8は、「より深刻な問題を抱えて、ニューヨークに戻ってくるなんて考えもしなかった」(後編)を含み、「ニューヨーク州への帰郷」を示す。

(5) ヘザーの叔母(マリ、健聴者)の語りの分析

マリは、前編と後編に登場しているが、発言は前編のみである。第1は、(人工内耳の子どもの家を訪問した場面で)「あの子たちは聞こえている」を含み、「聞こえの同定」を示す。第2は、「私の両親が聴覚障害者だったにもかかわらず、息子(ピーター)の聴覚障害を知って動揺した」を含み、「我が子が聴覚障害児であることによる混乱」を示す。第3は、(息子のピーターの聴力検査場面で)「あの音を聞きながら、息子のことを考えると身を切られる思いだった」、「赤ちゃんが初めて泣く声、美しい雨音、雨が地面に落ちる音」を含み、「音の認識」を示す。第4は、(ニタとの会話場面で)「聾学校はダメよ」、「聾学校の高等部を出ても読解力は小学校4年生程度だ」、「悪いのは子どもじゃなくて、学校である」を含み、「聾学校への拒絶」を示す。

(6) マリの祖父母(聴覚障害者)の語りの分析

マリの祖父母は、前編のみの発言である。第1は、「みんな、聾者が怖い?」を含み、「健聴者の聴覚障害者への恐怖」を示す。第2は、「聴覚障害児が今度、生ま

れたら手術をするの？」を含み、「人工内耳の手術の理由」を示す。第3は、(孫のピーターが聴覚障害者であることがわかったとき)「耳の聞こえない仲間ができた」を含み、「同胞の誕生の喜び」を示す。第4は、「みんな、私たちを見ると硬くなってしまうの？」を含み、「健聴者の聴覚障害者への心理的距離感」を示す。第5は、「聴覚障害児が話せるようになれば、私たち(聴覚障害者)を傷つけるかもしれない」を含み、「話すことによる聴覚障害者への攻撃」を示す。第6は、「聴覚障害者が生まれたのは、神の恵みよ」を含み、「神の恵み」を示す。

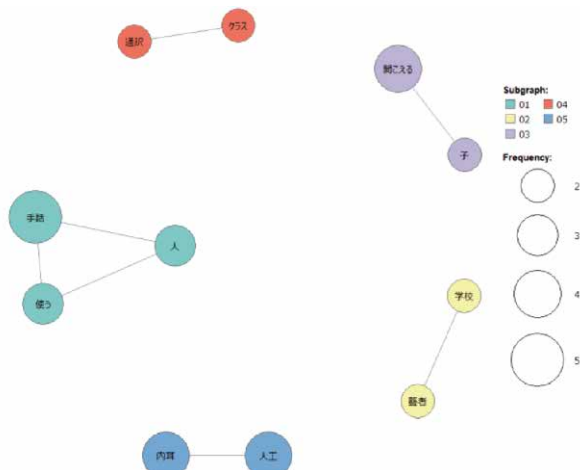


図2 ヘザーの共起ネットワーク

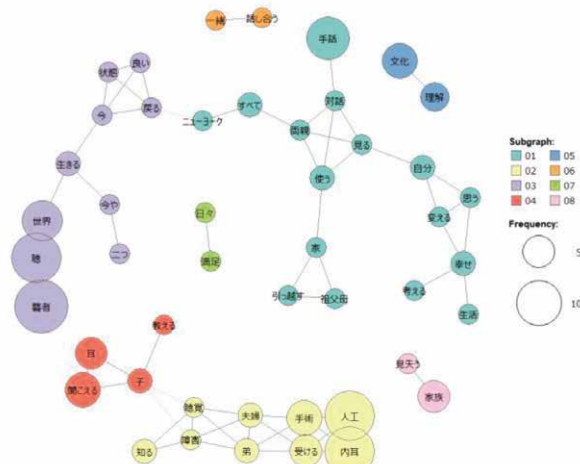


図3 ピーターの共起ネットワーク

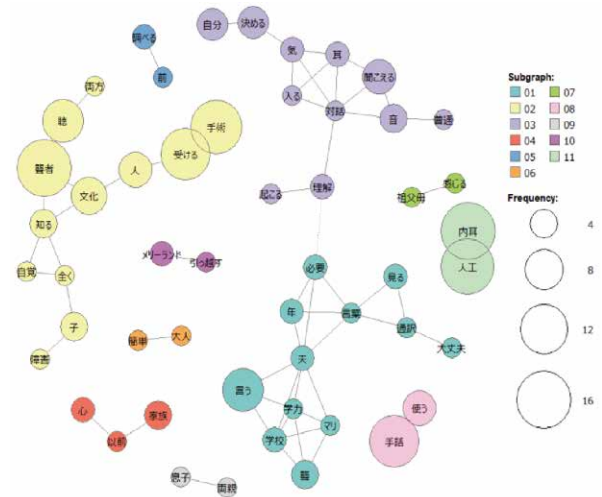


図4 ニタの共起ネットワーク

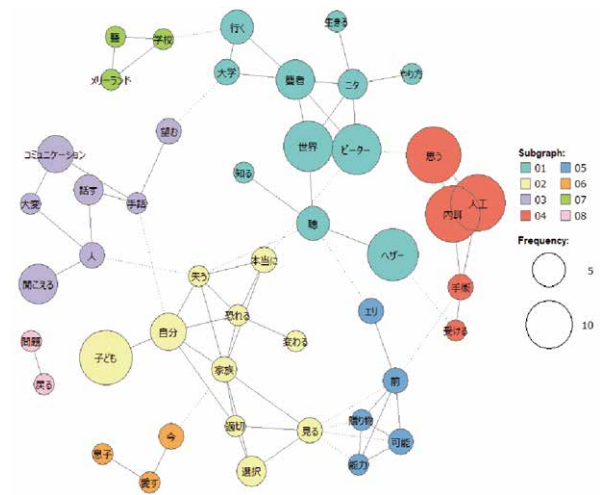


図5 ヘザーの祖父母の共起ネットワーク

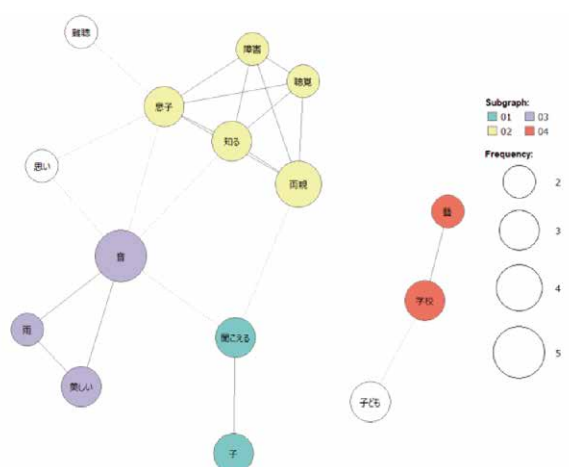


図6 ヘザーの叔母の共起ネットワーク

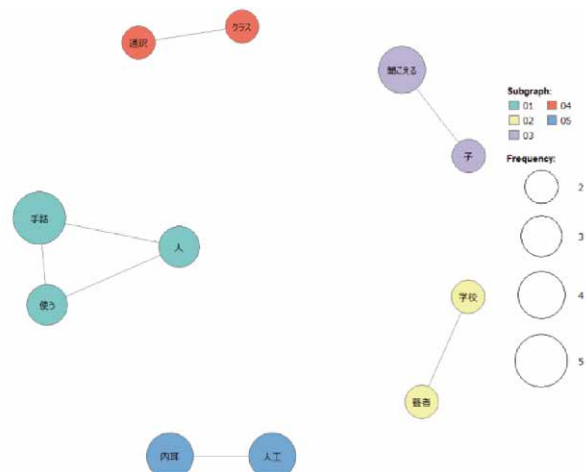


図7 ヘザーの叔母の両親の共起ネットワーク

IV. 考察

二つのドキュメント映画の制作者は、1999年当初、後編を作成する意図は明確になく、視聴者からのコメントに応ずるために後編を作成したものと推測される。後編は30分程度のもので短編である。前編との状況の違いは、ヘザー、ヘザーの弟、マリの息子のピーター、そしてニタの4人が人工内耳の手術を行い、現在もこの4人は一緒に聞こえと話し言葉の訓練を受けている点である。製作者は、何故、このような状況に変化したのかを4人の家族の語りで表そうとしているものと思われる。後編では何故、人工内耳手術に踏み切ったのかを追及していくためにピーター、ピーターの祖母が回想する場面を使用している。前編と後編の推移を検討することにより、その要因の一端は明らかになると考えられる。伊藤(2008)の聾者社会と聴者社会の関係のモデルをもとに、今回の登場人物のアイデンティティの移行を考察する。

(1) サブグラフの分析から

サブグラフの語りの特徴と推移を明らかにしていくために抽出語句から文と文の関連性をみて、その特徴を前編と後編でどのように推移したかを考察する。

1) ヘザー

前編は、1の「健聴者の手話の未使用」、5の「人工内耳手術前後の思い」、3の「友達は健聴者と聴覚障害者」であった。後編は、2の「通常の学校の唯一の在籍」、4の「教室での手話通訳者の情報保障」となっている。ヘザーは、健聴者は手話を使用しないために、自分が人工内耳の手術をして、自分から健聴者の世界に入っていこうと考えていたと推測され、通常の学校で手話通訳者の支援を受けながら学校生活を送りたいと考えていると推察される。

2) ピーター

前編は、7の「音のない世界に満足」、2の「人工内

耳手術の申し出」、4の「聴覚障害者が聴覚障害児に話ことばを教えることに限界」であった。後編は、1の「メリーランド州での生活の述懐」、3の「ヘザーは聞こえの文化と聾文化の二つの文化の懸け橋」、5の「健聴者文化と聾者文化の共存」、6の「家族における手話コミュニケーション」、8の「妻への思い」となっている。後編の陳述は、ピーターが人工内耳に賛同するようになった要因の一端を反映しているものと考えられる。ヘザーが人工内耳の手術をすれば、祖父母と弟夫婦、従兄のピーターやもう一人の双子に話し言葉でコミュニケーションを行い、叔父や叔母とは手話で話すことができる。この状況からピーターは、ヘザーは聞こえの文化と聾文化の二つの文化の懸け橋であると感じているのであろう。ピーター自身は、音のない世界に満足している。4にみられるように、ピーターはヘザーに話し言葉を教えられないことを自覚している。

3) ニタ

前編は、3の「人工内耳手術の自己決断」、5の「人工内耳手術前の理解」、8の「手話コミュニケーションの固執」、9の「聴覚障害者への軽蔑心」であった。後編は1の「人工内耳手術の不要の理由」、2の「ヘザーは聾文化にいる」、4の「人工内耳への考え方の修正」、6の「人工内耳手術の子どもの可能性」、7の「ヘザーの祖父母とのコミュニケーション願望」となっている。

4) ヘザーの祖父母

前編では、6の「息子(ピーター)への愛」が中心である。幼少期には、祖父母とピーターの弟と健聴の3人に囲まれ、ピーターが唯一、聴覚障害者であった。祖父母は、この家族とは、手話と話し言葉の両方で話したいと考えている。祖父母は、人工内耳を拒絶する理由として、1の「ヘザーを聾者世界に隔離」、4の「ピーターの人工内耳のコミュニケーションへの懸念の推測」、7の「聾者文化への接近」を挙げていると考えられる。人工内耳に踏み切ったことによるプラスの面として、2の「家族への支援」、3の「集団における聞こえ」、5の「可能性の開花」を挙げている。最初、祖父母は、ヘザー一家とニューヨーク州で一緒に生活していた。人工内耳を諦めるためにメリーランド州に転居したが、時間が経つにつれ、ヘザー一家が分断されていたことが、8の「ニューヨーク州への帰郷」として表出されている。ヘザー一家の分断の理由は、ヘザーと二人の子どもはニューヨーク州で生活し、父親のピーターが単身赴任していたことによるものと思われる。

5) 叔母のマリ

叔母のマリとニタは、疎遠の関係ではないことが映像から読み取れる。マリは、CODAであり、健聴者には話し言葉で、聴覚障害者には手話で話す。マリは、1の「聞こえ」、3の「音」に深く関心を寄せており、2の「我が子が聴覚障害児であるとわかって動転」し、4の「聾学校への絶望感」から人工内耳の手術をさせ

たいと考えているものと思われる。マリの家族は、聴覚障害児のピーターが人工内耳手術を行えば、家族全員が話し言葉で話せると考えている。ペーター一家とヘザー一家は、近隣の関係にあり、4 人の子どもたちは、お互いの家をいつも行き来している。

6) マリの祖父母

マリの祖父母は、孫であるピーターが聴覚障害児として生まれてきたことに、3 の「同胞の誕生の喜び」、6 の「神の恵み」と考えている。ペーター一家は、両親と双子のうちの一人が聴覚障害児であり、もう一人は健聴児であり、祖父母は孫と手話で話すことができるとする。人工内耳の手術を行うことにより、話し言葉で話ようになることに対して、1 の「健聴者の聴覚障害者への恐怖」、4 の「健聴者の聴覚障害者への心の閉ざし」、5 の「話すことによる聴覚障害者への攻撃」、2 の「聴覚障害児には人工内耳は必要か?」として表出されている。

(2) コミュニケーション選択とアイデンティティ

図 1 の 4 群の特徴をのべる。1 は、人工内耳や補聴器などテクノロジーを使って少しでも聞こえるようにし、そして口話法を習得して、聞こえる人の社会に同化し、成功した聞こえない人を表している。3 は、手話を母語とし、補聴器・人工内耳などを拒否し、ろう社会の中で生きるろう者である。4 は、手話を自分たちの母語とし、ろう文化を持ち Deaf としてのプライドがある。聞こえる人に手話やろう文化を教えたり、手話通訳または、パソコンで提供される文字情報(たとえば、テレビの字幕)を聴者とのコミュニケーション手段とする。ろう者であるというアイデンティティをもって、ろう者社会と聴者社会の両方を行き来する(伊藤, 2008)。

共起ネットワークの分析から次のようなことが推測される。(1) で示したように、

- 1) ヘザーは、4 から 3 に移行したのではないか。
- 2) ヘザーの父親であるピーター(聴覚障害者)は、4 のままである。
- 3) ヘザーの母親であるニタ(聴覚障害者)は、4 から 3 に移行した。
- 4) マリ(健聴者)の両親(聴覚障害者)は、3 のままである。

(3) なぜ、ヘザーとニタは、人工内耳の手術に踏み切ったのか。

前編の時点で、人工内耳推進派は、「音が聞きたい」と手話で話すヘザーの夢を諦めさせることにやるせない思いを感じたであろうし、バイリンガル教育推進派は、ヘザーが聾文化の中で育っていくことを期待したであろう。

ニタ自身も手話に固執しながらも人工内耳に関心を

もち、自身とヘザーの手術の決断は悩んでいた。ニタは、実際に祖父母と手話通訳者らと同行して、人工内耳の手術を行った家庭を訪問している。マリの発言の第 1 にあるように、人工内耳の子どもの家を訪問した場面で、マリはヘザーに「あの子たちは聞こえている」と話している。ニタの第 7 にあるように「子どもたちが祖父母に会いたがっていると感じていた」ことから、祖父母と話すには人工内耳を容認していく方向に傾いた。ニタの第 6 にあるように、「大人は、手術を受けても簡単に話せるようにならないが子どもならできる」ことをわかりながらニタは、ヘザーの気持ちを理解するために自ら人工内耳の手術に踏み切った。前編では、ニタは悩みながらもヘザーが今現在は、聾文化にしていると判断し、手術は先送りしたものと推測される。

(4) 手話システムとモード・スイッチ

この映画では、『健聴者は、話し言葉で話すが、聴覚障害者は、手話で話す』と説明している。「手話」を厳密に定義していない。映像から登場人物が使用している手話システムを分類する。ヘザーは、前編では、ASL(アメリカ手話言語)に近いものであったが、手術後は、MCE(英語対応手話)を使用している。通常の学級での手話通訳士は、MCEを使用していた。ヘザーは、祖母と話をするときは、手話なし、あるいは、MCEである。ヘザーの祖母は、息子のピーターが年少の時は、手話を使用しなかったが、その後、MCEを習得し、息子のペーター夫婦、マリの祖父母とは、MCEで話している。ペーター夫婦とマリの祖父母は、ASLで話す。ニタは、ヘザーと祖母にはMCEで話しており、ヘザーのロール・モデルとなっている。ヘザーの友達もMCEで話している。

人工内耳の手術を受けることにより、4つの家族のコミュニケーション方式が、話し言葉と手話の二つが保障され、時と場合(相手)によってモード・スイッチしている。このことにより4つの家族の絆が強固なものになったと言える。

V. おわりに

本研究では、今から 23 年前に制作されたドキュメント映画の登場人物のセリフを分析した。人工内耳対バイリンガル教育の対立を感情的にとらえることを排除するために客観的手法であるテキストマイニングの手法を採用した。その結果を伊藤(2008)が提案したモデルに適用した。その結果、人工内耳の手術を受けた聴覚障害者は、ろう者であるというアイデンティティを持って、聾者社会と健聴者社会を行き来する様相が示された。

この 20 年間の障害者問題はグローバル化の時代となった。2006 年 12 月に『障害者の権利に関する条約』が第 61 回国連総会で採択され、2008 年に発効

した。日本は、2007年9月28日に署名した。その後、2013年6月に障害者差別解消法が成立するなど、時代は変化している。合理的配慮を提供することにより障害者の障害の制限を軽減していく考え方が根底にある。人工内耳手術を合理的配慮とみなすならば、聴覚障害者のアイデンティティは、移行することが示唆された。このことから聾者社会と聴者社会の関係を固定的に捉えるのではなく、流動性があるものと認識していくことの方が現実には即しているのではないかと考えられる。しかしながら、冒頭で述べたように今回は、事例の分析であり、一般化を論ずるには早計である。

付記；後編の「Sound and Fury - six years later（「音のない世界で - 6年後 -」）は、元筑波大学教授の齋藤佐和先生よりお借りした。ここに記して感謝申し上げます。

注1：前編も後編も同一の製作者である。続編の「音のない世界で - 6年後 -」（「Sound and Fury - six years later」）の冒頭において制作担当者のアーノルソン氏は、次のように語っている：「1999年にニューヨーク州ロングアイランドに住む、ある一家の映画を作りました。「音のない世界で」（原題は、「Sound and Fury」）です。この映画は、二人の兄弟の葛藤を描いています。一人は聴者であり、一人は聾者です。そして二人には聾の子どもがいました。聴者であるクリス夫妻は、人工内耳と呼ばれる新しい技術について、それが子どもの聞こえの助けになると考えます。しかし、聾者であるピーター夫妻は、聾者の世界の多くの人たちがそうであるように、聴覚障害をハンディキャップと考えません。ピーター夫妻は聾者であることを好み、聾者の世界が好きでした。このため人工内耳手術を受けさせるというクリスの選択は、ピーターを怒らせてしまいます。しかし、ピーターの子どもでもあるヘザーが5歳になったとき、ピーターに人工内耳について尋ねてきました。ピーターの価値観は非常に揺らぎます。前編の「音のない世界で」は、ピーター夫妻の物語です。夫妻は、人工内耳について苦心しながら情報を集め、娘と自分の家族にとって人工内耳がどのような意味があるのかを探りました。ピーターは、ヘザーには何よりも人工内耳が必要だと考える祖父母との議論を終わらせました。結局、ピーターの家族は引越して、この一家はバラバラになったのです。「音のない世界で」が公開された直後から、みんなが私に「ヘザーはどうなったの？」「あの家族はどうなったの？」という質問があったのです。そこで、6年たった今、再び一家を訪れました。「音のない世界で」を見たことがない人のために、最初の数分は、「音のない世界で」からのシーンをお見せします。これにより、この話の特徴とストーリーがわかるでしょう。なお、クリスの子どもは、現在、7歳で健やかに成長していますが、今回、この映画に

は出演しないことに決めました。それでは、「音のない世界で - 6年後 -」をどうぞご覧ください。

注2；前編の「音のない世界で」は、2001年第28回日本賞の総理大臣賞（一般教養部門最優秀番組）を受賞している。日本賞は、全参加番組を通じて、最も教育的価値の高い優れた番組に贈られる。

日本賞受賞理由；番組の内容は、「人工内耳移植により、耳の不自由な人々の聴覚が回復する可能性が広がってきている。聴覚に障害のある幼い子どもに移植を受けさせるか、あるいは、あるがままの姿を尊重すべきか……番組は、難しい選択を迫られる二組の夫婦を追ったドキュメンタリーである。一方の、ともに耳が不自由な夫婦の5歳の長女は、音のある世界に興味を持ち始め、人工内耳の移植を望んでいる。しかし、話し言葉とは違う手話の文化に誇りを持っている両親は、彼女に聾者としてのアイデンティティを持つてほしいと願っている。そして、聾者への理解とおもいやりのある小さな町への移転を決めたのをきっかけに、長女は考えを変える。もう一組の夫婦は、生まれた息子が難聴であることを知って、人工内耳移植を選択する。聾者の両親のもとで育った妻は、手話の文化を理解していながらも、親として、子どもの可能性をできる限り広げてやるのが最善と考えたからだ。番組は、それぞれの決断に至るまでの、お互いの意見のぶつかり合いや心の葛藤を克明に映し出している」

審査講評：「音のない世界で」は優れた教育テレビ番組に対する審査基準をすべて満たしている。この番組は、聴覚障害者の世界を内面から見たまれな番組である。二人の聴覚障害児に人工内耳移植手術を施すべきか否かという決定に焦点を絞り、そこから発展して、家族、アイデンティティ、障害、子どもの権利、マイノリティである聾者の文化についてドラマティックに訴えかけてくる。そして、ほとんどの視聴者はテレビ教育番組の望ましい効果のひとつを経験する。つまり徐々に自分自身の姿勢を問い直すのである。また、この番組は、取材を受ける側と番組を作る側との間に親密な信頼関係が築かれており、ドキュメンタリーを制作する上での理想的なモデルとなっている。

注3：「ろう」をテーマにした映画祭である「東京国際ろう映画祭」が、2017年、2019年、2021年に開催されている。第2回は、2019年5月に開催され、PANORAMA 4作品のうちの一つとして前編の「音のない世界で」、後編の「音のない世界で-6年後」が上映された。2021年の第3回には、アンコール上映として、この二つの作品が上映されている。

注4；前編のあらすじを映画の中の字幕で示すと次のようになる。

ニューヨーク州ロングアイランドである。/ヘザーはもうじき5歳、生まれたときから耳が不自由である。/祖母はヘザーに人工内耳手術を受けさせたいと思っている。/ヘザーの一家は、父母と子ども3人、5人とも聴覚障害者である。/ピーターの弟夫婦、クリスとマリの間に生まれた聴覚障害を持つ子どもの名前もピーターという。/クリスとマリは、人工内耳手術をおこなっている病院を訪れた。/二人はその足で、地元ロングアイランドの視聴覚センターを訪れた。/人工内耳をつけた子どもたちは、ここを経て、普通の幼稚園や学校に入る。/弟夫婦クリスとマリは人工内耳に心が傾いている。/マリは息子に人工内耳手術を受けさせるつもりだと、聴覚障害者の両親に伝えた。/ニタは、まず自分自身が人工内耳手術を受けてみようと考え始めた。/ニタはヘザーを連れて、先ごろ弟夫婦が訪れた視聴覚センターを見学した。/ニタの一家は、センターにいた5歳児シェルビーの家を訪問した。/シェルビーに会った感想は、ニタと義妹のマリとは全く違うものだった。/ヘザーに人工内耳手術を受けさせたがっていた祖母に、ニタとピーターは自分たちの結論を伝えた。/ピーターは、ウォール街の大手証券会社で働いている。/地元、聾学校（特別支援学校）の収穫祭/一家はメリーランド州のフレデリックを訪れた。街には多くの聴覚障害者が住み、評判のいい聾学校（特別支援学校）もある。/一家は、その足で不動産業者を訪れ、家探しを始めた。/レノックスヒル病院、マリとクリスの息子ピーターの人工内耳手術の日、ピーターの祖父母たちも病院に駆け付けた。/聾者であるマリの両親は複雑な気持ち、聴者である両親のように手放して喜べない。/1カ月後。この日、はじめてピーターの人工内耳の電源が入れられる。/ニューヨーク耳鼻咽喉学研究所人工内耳センター

注5；後編のあらすじ

母親がヘザーになぜ、人工内耳にしたいのか、という質問場面（前編の繰り返し）/人工内耳手術を行う医師の見解/（字幕）1999年、ヘザーは、両親とシェルビーの家を訪問しました。シェルビーは、5歳になり、聴覚障害児で人工内耳の手術を受けていました。/シェルビーが歌を歌う場面（通訳者同伴）/ヘザーの父

親の人工内耳への意見（前編の繰り返し）/（字幕）人工内耳についていろいろと調べた後に、ヘザーの両親は、人工内耳の手術は、ヘザーにとって良くないと決断した。ヘザーの祖父母は、この決定に強く反対した。/ヘザーの両親と祖父母の会話場面/メリーランド聾学校の授業場面/祖母へのインタビュー場面/ヘザーの母親/ヘザーの父親/ピーターの父、ヘザーの祖父：健聴/ピーターの母親；ヘザーの祖母：健聴/ピーターの父、ヘザーの祖父：健聴/ピーター/（字幕）ヘザーは、9歳の時に人工内耳の手術を受けた。それから3年後である。/STによる聴覚法による言語訓練の場面/ピーターの父親/ヘザーの友達との団らん場面/祖母/ヘザーの話/ヘザーの授業風景/学級の担任/中学校の校長/バスケットボールの練習風景/ヘザー/バスケットボールのコーチ/ヘザーの歓声/(祖母とのやり取り)帰りの迎えの場面/祖母/祖母との調理場面/レストランでの家族団らんの場面/(言語治療をみんなで行く場面)/(ヘザーの叔母)/(言語治療の場面)/(ヘザーの叔母)/叔母との遊び場面/ヘザーの母親/医者/ニタ/医者/ニタ/レストラン/ニタ/祖母/ニタ/祖母/ピーター/GA Leigh 教授/祖母/ヘザーの自分の人生で3つのことをやってみたい/祖母とヘザー語らい(祖父との出会いの回想)

文献

- 1) 石川 准(1999)障害学への招待：社会、文化、ディスアビリティ 明石書店
- 2) 伊藤泰子(2008)聞こえない人のアイデンティティ 人間文化研究（名古屋市立大学大学院人間文化研究科）10、201-215.
- 3) 佐々木倫子（2018）これまでの日本におけるバイリンガルろう教育とその理論的背景 2018年3月18日 MHB 研究会事前学習会資料
- 4) 高嶋由布子、杉本篤史（2020）人工内耳時代の言語権—ろう・難聴児の言語剥奪を防ぐには— 言語政策 16、1-28.
- 5) 田中多賀子（2014）日本における人工内耳（治療）の導入が聴覚障害教育に与えた影響—1970年代から1990年代までの日本の状況— Core Ethics 10、131-141.